SCJ 53

アフガニスタン

ファトナと子どもたち

教育支援の現場から

スタッフからの便り



「スーパー16歳」

織物で生計を立て、炊事に洗濯、
病気がちな母と姉と弟の面倒を見る。学校にも通う。
ボランティアで村の子どもたちの先生もやっている。
「村の役に立ちたいの。子どもたちが立派に育ってほしい」
とてもたくましくて、とてもたのもしい。
2009年12月21日 アフガニスタン/ダレイシャ村の幼児教室

村の子どもたちに大人気の先生、ファトナ16歳（左）





仲良しのホジュラ（左）とオリファ（右）

「いひひひひ」

教室に笑い声がひびきわたる。
みんなで積み木、綱をほどくゲーム。
「たのしいっ！」「先生だいすき！ やさしいの！」
「見て見て！」「仲いいでしょ！」
遊びを通じて、元気な子どもたちは
もっともっと元気になっていった。うれしい。
2009年12月22日 アフガニスタン/ダレイシャ村の幼児教室

学びの環境は、こうやって整えられていきます

――アフガニスタンの園田スタッフの現地調査から一部をご紹介します



1. 2009年12月、首都カブールからＳＣ支援地のある北部へ。飛行機で約1時間。バルフ州マザリシャリフ空港に到着。



2. 隣のサリプル州へ。男の子たちがビー玉を地面のくぼみに向けて、指で弾き飛ばして遊んでいた。



3. ＰＴＡ集会に出た。長老など、村の偉い人たちが勢ぞろい。彼らからの信頼と協力関係を築くことが教育を広めるには大切だ。



4. 女性のＰＴＡメンバーにも会った。「女の子も学校に行かせなくちゃ」お母さんや女性教員たちは元気いっぱいだ。



5. 寒空の下、テントで女子中学生が授業を受けていた。この国の半数以上の学校にはちゃんとした校舎がない。



6.「この季節、テントの教室はすきま風がとっても冷たい。机も足りなくて地面で進級試験を受けました」



7. 冬休み。地元の教師たちに、暴力にたよらずに生徒を指導する方法を教えた。子どもの頃の体験談も語り合った。



8. 教員のハミドゥラは「昔は暴力が悪い事だなんて誰も教えてくれなかった。大人も考え方と行動を変えることが必要と学んだよ」



9. さらに隣のファリアブ州へ。道なき道を進む。途中、前方の大型トラックが故障し一本道がふさがった。



10. ファリアブ州のＳＣ事務所では、現地スタッフが幼児教室で配るおもちゃや教材を整理していた。たのもしい同僚たちだ。



11. ＳＣ支援の幼児教室は民家を開放。子どもが学校にすぐになじめるように、ＳＣでは入学前の教育に力を入れている。



12. カメラを向けると、最初はとまどっていた村の子どもたち。でも教室が始まれば、みんなの表情がゆるんだ。



13. 左奥はナウルーズ、14歳の中学3年生。教室の先生役を引き受けてくれた。医者になるのが夢。



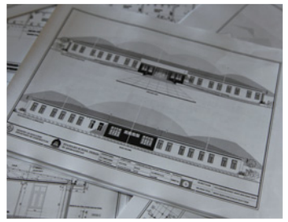
14. 手作り教材で数字や時計の読み方を学ぶ。ほかに、歌や紙芝居、ゲームなどの遊びを通して平和な心を育んでいく。



15. みんなで手を取り合うチェーンゲーム。笑顔がこぼれる。この年代は、男女で一緒に遊ぶことが許される。



16. この州でも青空教室や泥壁で出来た暗く狭い教室が多い。



17. 教育省による学校の設計図。中央や地方政府、地元の人々と連携を図りながら安全な校舎を建てていく。



18. 学校建設には、村人たちと一緒に安全な土地を慎重に選ぶことが不可欠。今後もみんなで団結することを約束した。

SCはセーブ・ザ・チルドレンの略称です。
SCJはセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの略称です。

スタッフ便り――「女の子も学校に通えるように」

アフガニスタン
園田智也



●アフガニスタン・イスラム共和国

約1500万人の子どもがいます。平均寿命は44年です。5歳未満児死亡率は世界で2番目に高く、出生1000人あたり257人が亡くなっています。15歳以上の識字率も低く、男性49％、女性18％です。（出典：世界子供白書2009）

●アフガニスタンでのセーブ・ザ・チルドレンの活動

職員数は現地職員も含めて290名程度います。就学前の幼児教育、学校での栄養・衛生の教育、教員の研修、学校の建設、PTAへの支援、お母さんへの栄養研修、助産師の研修、子どもの保護、家庭の生計支援など、支援活動は多岐にわたります。



カブール事務所で先日、現地スタッフと昼食をとっている時、こんな話が持ち上がりました。アフガニスタン全土の398郡のうち、中学校・高校に女子生徒が一人も通っていない郡の数はどれくらいか？ なんと200郡もあるそうです。全国の半数以上に上ります。治安が悪かったり、校舎やトイレの整備が遅れていたり、女性の教員が少なかったり……。女子教育の普及が遅れている理由は、たくさん挙げられます。

SCの教育チームは現在、北部の3つの州で、子どもたちの学習環境を整備する活動を行っています。前の2ページでは、昨年12月から1月にかけて行った学校建設のための調査の様子を一部紹介しました。

「アフガニスタンでは何事も根気が大切」そんなことをフィールドで自分に言い聞かせることがあります。学校の建設地選び一つとっても、その土地に根付く価値観や慣習に配慮することがとても重要になります。女子学校の場合、女子生徒は長距離の通学が出来ないので、村から遠いところに校舎を建てられません。逆に村の中心だと、男子校や人目の多いバザール（市場）に近すぎるため、たとえ立派な校舎があったとしても、女子が通うにはふさわしくない学校となってしまいます。さらに、中間地点にちょうどよい土地があっても、雪解けの春には洪水が起き、危険な土地へと変わってしまう場合もあります。目には見えないリスクや慣習をどうやって見抜くか、調査には慎重さも問われます。そして、そういった調査はSCだけでやれることではありません。州や郡の教育局の職員や知事、村の長老、PTA、教員、そして子どもたちなども交えて、意見を聞き、話し合いを重ねる地道な努力が大切になってきます。

中でも、村のことを誰よりもよく知っている長老たちと話す時、相手をじっと見据える彼らの眼差しとその貫録に圧倒されることがあります。こうした村人たちとひざを突き合わせて、じっくり話をし、信頼を築くこと。それが、アフガニスタンで女子教育を進めていく第一歩だと思っています。

みんなの声

一緒に話し合う経験が子どもの成長につながる

SCJ元インターン　中田洋子

昨年、インターンとして日本の子どものための事業に関わりました。思春期の子を持つ母として、自分の意見を持ち始める年頃の子どもたちへの「Hi5!」の実践は思い出深いものとなりました。小学6年生の授業で、SCの学校建設の支援について説明している時のこと。「自分の学校について一番よくわかっているのは誰？」という問いかけに、少し経ってから小さな声で「僕たち、子ども……」と返ってきました。自信のなさそうな声に、大人は、学校という場の主役が子ども自身であることを知りつつも、その主役の意見にあまり耳を傾けていないのではとハッとさせられたのでした。

「思ったことは何でも話し合おう」と、大人が子どもの声を聴き、一緒に話し合って、子どものよい意見を活かして形にしていったならば……。大人に意見を認めてもらった体験は、きっと子どもたちに自信を与え、責任のある意見を持つことにつながっていくのではと思っています。

日常生活の延長線上で私らしく社会に貢献したい

会社員　和田貴子

私の周りには、ちょっとした寄付からNGOの支援活動まで、社会貢献活動に取り組んでいる知り合いが比較的多いこともあって、頼まれれば出来る範囲で寄付に協力することがいつの間にか習慣になっています。どんなことを始めるにもまずは活動資金が必要で、周りを見ていても、資金集めは最初に直面する課題のようですから、なるべく協力したいと思っています。

以前は募金活動の様子を目にしても、「偽善っぽい」という意識が働いて参加しにくい部分もありました。でも最近では、例えば寄付付きの商品など、ハードルが少し低く、気軽に参加出来る機会が世の中全体に増えたように感じます。正直、私自身は社会貢献に対する志が高いというわけでもありません。でも、自分の生活スタイルを変えることなく、日常生活の延長線上で出来ることがあれば、これからもいろいろな活動に協力していきたいと思っています。

最近の出来事＆お伝えしたいこと

昨年12月19日、大丸神戸店にてJリーグのサッカーチーム「ヴィッセル神戸」のチャリティオークションが開催されました。宮本恒靖選手や大久保嘉人選手などのサイン入り公式試合球やフェアプレイフラッグ、サイン入りレプリカユニフォームなど計34品が出品され、落札金の全額をご寄付いただきました。

SCJではオリジナル教材「Hi5!」を活用し、地域のボランティアや団体の皆さまとの協働で、世界の子どもの状況や国際協力について伝える活動を行っています。この活動が、外務省主催「グローバル教育コンクール2009」活動報告部門にて、優秀賞を受賞いたしました。ご協力をいただいた皆さまに感謝申し上げます。

昨年9月30日に発生したスマトラ島パダン沖地震を受け、SCJでは、被災直後から日本人スタッフを現地に派遣し支援活動を行っています。今年1月からは、感染症を防ぐための衛生事業を60の小学校に対して実施しています。これらの事業は、皆さまのご寄付とJPFの助成で成り立っています。

2月7日、SCJが日本の子どもの貧困問題に取り組むにあたり、ユースジャパン100名の子どもたちと、関西最大の国際協力イベント「ワン・ワールド・フェスティバル」において、貧困に関する子どもの声を発信しました。会場では子どもたちの合唱と共に、貧困に関する子どもの声を来場者に届け、関心を高めるきっかけとなりました。

「みんなの声」募集

原稿を400字程度にまとめて、郵便か電子メールでお送りください。氏名とご職業の明記をお願いします。なお原稿は返却いたしません。掲載の場合は一部編集させていただくことがあります。送り先は裏表紙、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン ニュースレター編集係。メールアドレスはvoice@savechildren.or.jpです。いただいた個人情報は責任を持って厳重に管理させていただきます。

Save the Children JAPAN

＜編集後記＞

お伝えしたいことがまだまだあります。 ●今号の特集国をアフガニスタンに決めた時、園田スタッフに、読者にどんなことを伝えたいか質問しました。返ってきた答えは「アフガンのもうひとつの顔」でした。日本の報道では治安情勢の悪さが話題の大半を占めていますが、同じ国の中では、子どもたちがたくましく生きていて、女性たちが教育の普及に尽力している……。そのことを一番に伝えてほしいと言われました。ぜひ、アフガニスタンの人々の顔に注目して、もう一度読んでいただけたら幸いです。 ●「みんなの声」を掲載させていただきます。子どものこと、子育てのこと、ニュースレターの感想やＳＣＪへの意見など、ぜひ皆さまの声をお聞かせください。 ●最後に、今年１月に発生したハイチ大地震に対する緊急募金に、ご支援者の方々から多大なご協力をいただきました。ここに感謝を申し上げますとともに、いただいたご寄付は大切に使わせていただきます。岡田茜（ＳＣＪスタッフ）

【この冊子について】皆さまのご支援が子どもたちのためにどのように活かされ、何をもたらしたかをお伝えしたい。そして、子どもたちだけでなく、スタッフや SCJ に関わるすべての人々のことを皆さまの近くに感じて欲しい――。この冊子は、私たちのそんな願いを形にしたものです。
表紙写真：©Karin Beate Nosterud/Save the Children

発行：社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン　〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F
ご支援に関するお問い合わせ：03-6859-0068（平日 9：30-18：00）
印刷協力：日興製版印刷株式会社